

## に お い の 記 憶

松井 とし



りんごの出回る頃になると思い出すことがある。まだ私が幼稚園に入る前のことなのだが、ある日、私は心臓病で入院中の伯母の見舞いに連れて行かれた。お茶の水の順天堂医院の廊下には、左側から西日が差し込み、ゆったりした曲が流れていた。今でも覚えていゝるそのメロデーは、当時のラジオの健康番組のテーマ曲であつたらしい。右側に並ぶ病室のドアを開けると、そこは暗く異様なにおいが鼻をついた。

付き添いの人だったのでろうか、見知らぬ人がりんごをむいてくれたのだが、私にはどうしても食べられなかった。熟したりんごの甘酸っぱい香りと、室内に漂う病院特有の薬くさいにおいが入り混じって、私は最後まで首を振り続けたのだった。

一番年下の妹の子である私をたいそうかわいがってくれたというその伯母は、その後ほ

どなく五十歳そこそこの生涯を終えたのだが、あの時、子どもらしく喜んで、出されたりんごを食べることができたら、病人も嬉しかったろうにと、今もなお、胸のいたみとともにその時の情景を思い出す。

においを伴った記憶は、なんと驚くほど鮮明に蘇るものであろうか。

幼い子どもは感覚が鋭く、驚かされることがある。しかし、最近では、子どもたちをとりまくにおいには人工的なものがはんらんし過ぎている。お菓子やジュース類にはフルーツの、子ども用の模様入りのティッシュペーパーにはクッキーのにおいが付け込まれている。きんもくせいやバラの花の香りをトイレの芳香剤のにおいだと思っている子どもも増えていると聞く。

この夏、幼稚園のテラスで、水耕栽培のミニトマトを育てた。鈴なりになる黄色のトマトを収穫すると、ツンとおいが出た。「これが畑のトマトのにおいよ」と言いながら、私自身久しぶりの懐かしい思いでこのにおいをかいだ。

温室の人工照明で育てられたトマトにはこのにおいがない。

(神奈川県立教育センター)